

一淺間が岳は、絶頂凹にして底深く、たとへば播鉢の如し、是を釜と唱ふ、ふちめぐり凡一里餘有、中なる谷々より常に烟出る時は、硫黄解て器物より覆が如くにへ流れける、然る所明和年中より以來釜の中次第に砂石こぼれ積り、又底よりも土龍の起す如く、硫黄の氣にて砂石涌上り、數年大焼止ていよく埋り、四五年已來わけて埋る事數十丈深き大坑平地にひとし、去寅年望見るに、釜凸にして炭竈の如く、巖石積上げ大山となりぬ、近頃登山見る人毎に、間のあたり大やけあらむ、釜の中埋りたる事不審なりと口々に云傳ふ、是前表とや云はん、

一天明三癸卯年五月二十六日、已刻半雷の如く鳴渡り、黒燒雲の手の如く吹上げ、たゞちに山より東の方へ折て鼻田峠、蒲原村、六里が原、碓氷山つゞきへ横たへ、見渡し數十里、午の刻過て出口のけぶり半分へり、鳴も靜まる、然れども是より日夜烟ふとく絶へず出でたり、

〔一話一言 二十八〕信州淺間山上州吾妻山一件略○中

原田清右衛門御代官所

高合千六百四十石餘 上州群馬郡

南牧村 北牧村 川島村

男二千百七十人

女千二百十人

合

牛馬百七十疋

家數三百六十軒

右村々近所、上州吾妻山と申山有之、去月中旬より淺間山燒砂降候處、當八日、右吾妻山拔出夥敷、一度に大石砂押出、右三ヶ村民家悉く打潰、人馬共に利根川へ押流、翌九日利根川權現堂一川江戸川へ流出候様子、大き成立木根付候儘、並家居諸道具悉くこまぐに碎ケ、溺死人馬共